

ヨハネによる福音書 1章 29～34 節

今月は「ヨハネによる福音書」が「序言」(1:1～18)から「本文」(1:35～)に移るその移行部分の後段で、前回の前段(1:19～28)に続く箇所です。ヨハネによる福音書はここに至り やつと、イエス・キリストを実際に登場させます。すなわち、バプテスマのヨハネにこれを紹介させるといふかたちでイエスを登場させ、本文へと筆を繋いでいきます。

ならば、本文へと向かうその段にどんな言葉が響いてくるのでしょうか。それは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(29)という、よく知られたイエスのあの呼び名です。そして、そこにはどうやら、本音を言えば考えたくもない、しかし目を背けるだけでは済みそうにない、私たちのそんな問題が隠されているように思われます。人生を本物にするためには見なくてはならない。そんな類いの事柄について、ヨハネの福音書は今月、私たちに何を語りかけてくるのでしょうか。御一緒に、心の耳を静かに傾けたいと思います。

*なお(前回の繰り返しになりますが)、ヨハネの呼称については、新共同訳聖書は小見出しで「洗せんれいしや礼者ヨハネ」と表現していますが、ここでは従来の呼び方に従い、「バプテスマのヨハネ」と呼ぶことにします。

状 況

初めに、今月の出来事がどこで・どのような折に起きたのか、場面の状況を簡潔に見ておくことにしましょう。

・そもそも この出来事がどこで起こったかといえば、バプテスマのヨハネが人々にバプテスマを授けていたヨルダン川のほとりと考えられます。

①ヨハネ福音書は前回の最後のところで、バプテスマのヨハネがユダヤ当局とにただ問たい質たされたのは「ヨハネが洗せんれいしや礼れいを授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった」(1:28)と書き留めています。

②他方、「マタイ」「マルコ」「ルカ」の他の3つの福音書は、ヨルダン川でバプテスマを授けていたヨハネのもとをイエスが訪れ、ヨハネのバプテスマを受けられたと記しています(マルコ 1:9～11 他 参照)。その描き方は多少異なるものの、記事自体はヨハネ福音書のそれと重なります。

・したがって、今月の箇所はヨハネがそのようにしてバプテスマを授けていたヨルダン川のほとりでの出来事であり、イエス・キリストが御自分からヨハネのバプテスマを受けられた その折の出来事と考えられます。

・ちなみに、本来 バプテスマなど受ける必要のないはずの主イエスがなぜ それを受けられたのか。それは、私たちと全く同じ人間となり、私たちのすべてをその身に負うためでしたが、主イエスのバプテスマについては別の機会に譲ることにしましょう。

・今回は、バプテスマのヨハネの証言にこそ目を注ぎたいと思います。ヨハネの証言は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」との告白に凝縮されています。ポイントは、「世の罪」の正体とはいったい何なのか？「神の小羊」はそれをどうやって「取り除く」のか？ということではないでしょうか。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(29)

A. 「小羊」について

・実は 第一に、「小羊」には次のような 歴史に根ざした深い意味合いがありました。

①ユダヤの神殿では毎日、朝と晩に「犠牲の供え物」として小羊が捧げられていました。それは、人の罪を想い起こさせ、その赦しを神に求めるものでした。

②イスラエルの人々が奴隷のエジプトを脱出した あの「出エジプト」の夜、彼らは屠られた小羊の血を戸口の柱に塗りました。こうして、神の使いは血の印のあるそれらの家を過ぎ越す一方、印のないエジプト人の家に不幸をもたらし、イスラエルの人々の脱出を成功に導いたのでした。このため、この折の小羊は「過ぎ越しの小羊」と呼ばれます。それは、囚われと死からの解放を象徴するものでした。

③また、旧約聖書のイザヤ書が記す「主の僕」「苦難の僕」の姿があります。イザヤは、「屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった」（イザヤ 53：7）「（それは）彼が私たちの病を担い、私たちの痛みを負ったからであり、私たちの背きのために刺し貫かれ、私たちの咎のために打ち砕かれたからだ」（同 53：4～5）と言います。そして、「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。・・・わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた」（同 53：5～6）と記すのでした。それは、愛の神様の使いとして、私たちのすべてを身に負われた「主の僕」の姿でした。

④さらには、アブラハムが独り子イサクを捧げようとしたときの 旧約聖書の出来事がありました。アブラハムはイサクを捧げるため、山に登ります。その途中、イサクが尋ねます。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいますか」（創世記 22：7）。そのとき、アブラハムはこう答えます。「焼き尽くす献げ物の小羊はきっと 神が備えてくださる」（同 22：8）。そして、その言葉のとおり、最後の最後に 神は一匹の羊を用意し、イサクをアブラハムの胸に戻されたという出来事です。それは、真摯に御心を追い求める者に神御自身がなくてはならぬものを備えてくださるという そうした約束を意味するものとして人々に受け止められてきました。

⑤そして最後に、聖書の終わりの書「ヨハネの黙示録」に顕著な小羊の姿です。そこに見るのは、力ある勝利者の姿です。「この後、わたしが見ていると・・・数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである』（黙示録 7：9～10）。それは、この世が理解しがたい不条理や混乱で満ちていても、それでもなお私たちには 最終的にすべてを御手に収めておられる方がいるという信仰の告白にほかなりません。

・こうした背景を考えると、イエスを見て「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言ったバプテスマのヨハネの心中にははたして、どんな思いがあったのか。また、ヨハネの福音書をまとめた者たちはそこにどんなメッセージを込めて、これを記したのか。皆さんはどう思われるでしょうか。

B. 「罪」について

・次に「罪」についてですが、実はここにも 留意すべき点があります。

・それは、ヨハネの福音書がここで「罪」という語を複数形でなく、単数形で記していることである。
テーン ハマルティアーン ハマルティアー
 (τὴν ἁμαρτίαν < ἁμαρτία, -ας, ἡ)。つまり、

①複数形であれば、「嘘をついた」「ごまかした」「人を傷つけた」などといった 私たちが普通「悪さ」として言う一つひとつのあれこれを意味するのですが、しかし、

②それが単数形となると、そうではなく、すべての根っこにある根本的な罪の性質を指すということである。

・「罪 (ハマルティアー ἁμαρτία, -ας, ἡ)」とは、新約聖書が書かれた原語のギリシア語ではそもそも「的外れ」を意味しました。「的外れである」「見る方向が違う」「見当違いである」ということです。つまり、「根っこのところで 自分の方ばかり向いていて、神様の方を向いていない」というわけです。

・であれば、私たちはここで、私たちのどんな現実を目をやり、それに対し いかなる深さの・いかなる向かい方をしたらよいのでしょうか。聖書が問題にするのは いつのときも、気の持ちようとかか小手先の対症療法とかいったものではなく、物事の根っこに関わる本質的なあり方です。

C. 「取り除く」について

・ヨハネの福音書は、私たちの内に潜むこの根源的な罪性を「取り除く」ために イエス・キリストが来てくださったと語ります。

・原語のギリシア語 (アイローン ἄρῳ < アイロー ἄρῳ) に従えば、そこには以下のような意味合いが見て取れます。

①物を手に取って運ぶ。

②それを その場から持ち去る。

さらには、ここから裁判用語に派生し、

③罪責を破棄する

という 重要な意味を持つようにもなりました。すなわち、もんせきめんじょ 問責免除ということである。

・いったい、「(神の) 小羊が (世の) 罪を取り除く」とはどういうことなのでしょう。

「わたし〔ヨハネ〕は、バプテスマ 水で洗礼を授けに来た」(31)

「その人〔イエス〕が、バプテスマ 聖霊によって洗礼を授ける人である」(33)

・以上と関連して言われているのが、「洗礼」のことである。

・しかも、そこには 2種類バプテスマの洗礼が登場します。

①「水」の洗礼

②「聖霊」バプテスマの洗礼

そこにはいったい、どんな違いがあるのでしょうか。

・一つの考え方として、次のような理解の仕方はいかがでしょうか。

①バプテスマのヨハネによる「水」のそれは、何より「悔い改め」のバプテスマでした。しかし、それは悔い改めて清めてもらい、そのようにして罪の裁きから救ってもらうにとどまる、いわば「消極的なバプテスマ」とでも言うべきものでした。

②それに対し、イエス・キリストのバプテスマは「聖霊」によるもので、「新たないのち」を生み出す「積極的なもの」と言えるでしょう。神の御心^{みこころ}を教えるだけでなく、それを生きる力をも与えてくれるものです。

・教会で行なうバプテスマも、形のうえではたしかに「水」のそれです。けれども、イエス・キリストへの信頼があるそのところにおいて、それは、生ける主イエスがそこに臨まれ 御自身の伴いでそこを包んでくださる、この約束の「聖霊のバプテスマ」でもあるのではないのでしょうか。

罪の問題は、誰しも正面から向き合いたくない、できれば避けて通りたい問題です。しかし、私たちには いつのときも、しらばくれたりごまかしたりしてはいられない事柄があるように思われます。そのような問題の一つに、今月、聖書を通して向き合ってみてはいかがでしょうか。